第３章

児童委員活動等の状況に関する

ヒアリング調査

1　調査概要

（１）調査の目的

Ａアンケート調査とＢアンケート調査の結果から、今後の児童委員活動の参考となる好事例について抽出し、民生委員・児童委員、主任児童委員活動の充実・強化や、関係機関、住民への周知を図るための実践事例集を作成することを目的に、ヒアリング調査を実施した。

（２）調査の枠組み

①調査対象抽出の考え方

調査対象は、全民児連が策定した「全国児童委員活動強化推進方策 2017」の４つの重点に基づき、継続的または先駆的な事例であり、単位民児協や市区町村民児協のバックアップがあり、かつ区域担当民生委員・児童委員と連携協力していることを条件に、Ａアンケート調査の事例および委員推薦により全国８か所を選出した。

②調査対象

民生委員・児童委員、主任児童委員、単位民児協、市区町村民児協、連携先など、実際の活動に関わる方

③調査実施期間

令和元年 11 月～令和２年１月

④調査実施方法

事前にインタビューガイドを送付し、調査当日はグループインタビューを実施した。倫理的配慮として、全国社会福祉協議会におけるプライバシーポリシーに基づき実施することとし、取り扱う事例については個人情報を含めないことを周知した。

⑤調査内容（ヒアリング項目）

１．活動のきっかけ・あゆみ
２．活動内容
３．活動の効果
４．活動継続のための課題や今後の展望　など

※民生委員児童委員協議会は「民児協」に省略し表記している。

（３）調査対象概要

事例	活動名称	所在地	ヒアリング実施日時
活動事例 1 **P80**	赤ちゃんルーム 「チルチル・ミチル」	愛知県名古屋市	1 月 14 日（火） 10:30～12:30
活動事例 2 **P84**	安中市乳幼児宅訪問事業	群馬県安中市	12 月 26 日（木） 10:30～12:30
活動事例 3 **P88**	ＳＮＳでつなぐ主任児童委員活動 ―親子支援―　～赤ちゃん同窓会・ 赤ちゃん訪問の実践から～	滋賀県湖南市	12 月 25 日（水） 14:00～16:00
活動事例 4 **P92**	家庭訪問型子育て支援 「ホームスタート・さくら」	千葉県佐倉市	12 月 19 日(木) 15:00～16:50
活動事例 5 **P96**	土曜日の子どもの居場所づくり 「香住っ子ひろば」	福岡県福岡市	12 月 7 日（土） 14:30～16:30
活動事例 6 **P100**	退所児童無料学習塾 「ひだまり」	大阪府大阪市	11 月 30 日（土） 14:30～16:30
活動事例 7 **P104**	川上小学校サマースクール 乳幼児と中学生のふれあい交流会	熊本県熊本市	12 月 23 日（月） 14:00～16:20
活動事例 8 **P111**	早通子ども食堂 「ひまわり食堂」	新潟県新潟市	1 月 21 日（火） 13:30～15:30

ヒアリング選択のポイント	活動内容
転勤してきて近隣に知り合いのいない親子に対する子育てサロン活動。市が実施している赤ちゃん訪問事業と連携し、参加を呼びかけている。	転勤等により引っ越しをしてきた親子が多く、孤立させないことを目的に、月齢 3 か月以上から 1 歳未満の親子を対象に子育てサロンを開催。月齢が近い親同士の横のつながりができるようにしている。
乳幼児家庭へのアプローチを組織的に実施。行政と連携し、子育てに必要な情報を集約し、配付することで委員活動の PR にもつながっている。	民児協独自事業として、年 1 回乳幼児家庭の全戸訪問を実施している。お土産と民生委員・児童委員、主任児童委員活動や子育て支援に関するパンフレット一式を持参、周知活動と併せて乳幼児宅の見守り活動を行っている。
子育て中の母親に民生委員・児童委員、主任児童委員を周知するための手段として SNS を活用。気軽に相談できるきっかけとしている。	「赤ちゃん同窓会」の案内をきっかけに SNS の活用に取り組んでいる。現在は赤ちゃん訪問の HP を開設し主任児童委員の紹介や、LINE@から定期的な子育て支援情報を発信、相談等につながっている。
主任児童委員が NPO 法人と連携し、未就学児の親子に対する訪問型子育て支援事業を開始。民児協と連携・報告しながら、進めている。	孤立しがちな就学前親子を対象に、研修を受けたボランティアが自宅を訪問し、親子に寄り添い支援する、ホームスタート事業を行っている。民児協の事業計画に位置づけ、活動の報告などを行っている。
公民館を拠点として、地域のさまざまな機関・団体と協働して活動を展開している。地域全体で子育てを応援するネットワークができている。	土曜日の子どもの居場所づくりとして、運営母体を青少年育成連合会にし、月 2 回公民館において小学生を対象に、遊びや体験活動を開催している。地域の団体や機関と連携・協働し、学生ボランティアも参加している。
母子生活支援施設と協働して、退所児童や地域の子どもたちへの支援に取り組んでいる。民児協は無理なく長く続けることを方針としている。	民児協と母子生活支援施設との協働事業として、毎週土曜日公民館で、退所児童や地域の子どもたちへの無料学習塾を開催してる。社会人や学生ボランティアが学習支援を担当し、民児協、施設はそれぞれ役割を分担している。
小学校においては子どもの居場所づくり、中学校においては乳幼児と中学生の交流を、民児協と学校とが協働で取り組んでいる。	民児協と学校との協働による活動で、小学校では、夏休み期間中、小学生の自主学習の支援を行っている。中学校では、中学生と乳幼児親子との交流を行い、子育ての喜びや命の大切さを伝えている。
長期休暇中の子どもの居場所づくりをきっかけに、子ども食堂を検討。子どもから高齢者を対象としたことで、多世代交流の場となっている。	月 2 回土曜日の昼に、地域住民の拠点の会館において子ども食堂を開催している。地域の子どもから高齢者までを対象に食事を提供し、「家族的団らん」と「地域のつながり」を図り、多世代交流の場となっている。

2　ヒアリング結果概要

■活動事例１　赤ちゃんルーム「チルチル・ミチル」

【ヒアリング実施状況】

実施場所：　植田南コミュニティセンター
実施日時：　令和２年１月 14 日（火）10:30～12:30
対 応 者：　植田南学区民生委員児童委員協議会　会長（会長歴６年目）
植田南学区元主任児童委員（経験年数 26 年）
植田南学区主任児童委員（経験年数９年目）
植田南学区主任児童委員（経験年数２年目）
植田南学区主任児童委員（経験年数１年目）
名古屋市子育て支援課子育て支援係　係長
名古屋市子育て支援課子育て支援係　担当者
天白区民生子ども課　主事
実 施 者：　事務局３人

【事例に関する基本情報】

活動目的・内容	初めて母親になった人や、転勤により引っ越してきた親子を孤立させないことを目的に、3か月児健診受診者を対象に、子育てサロンを開催している。
活 動 地 域	名古屋市天白区植田南学区
対象者・参加者数	第１子月齢３か月以上１歳未満の親子　約 30 組
活 動 場 所	植田南コミュニティセンター
活 動 状 況	１か月３回　火曜日午前中に開催（８月は休み）
参　加　費	初回のみ 200 円
活　動　者	主任児童委員３人
連　携　先	地区担当保健師、天白区民生子ども課
財　　源	地区民生委員児童委員協議会助成金

【植田南地区の民生委員児童委員協議会について】

名　　称	植田南学区民生委員児童委員協議会
委　員　数	民生委員･児童委員 21 人、うち主任児童委員 3 人

【ヒアリング内容】

1. 活動のきっかけ･あゆみ

- 平成 10 年度より天白区全学区の児童委員活動として、主任児童委員と区域担当民生委員・児童委員が、3 か月児健診受診後の家庭を訪問する「すくすく訪問」を始めた。なお、平成 19 年度からは名古屋市の子育て支援施策の事業「赤ちゃん訪問事業」となっている。
- 植田南地区は地下鉄の開通とともに大規模集合住宅や社宅等の建設が進んだ地域である。住民の中には転勤で引っ越してきた家族も多く、近隣に知り合いがいないなか、子育てをしている家庭が増えている。
- 「すくすく訪問」の訪問先が 3 か月間で 100 件にのぼり、対象世帯が増えていった。その当時は主任児童委員が 1 人体制であり仕事もしていたため、区域担当民生委員・児童委員や訪問先家庭との日程調整等に大変苦労した。
- また、訪問事業とは別の子育て支援活動として親子で集える場づくりを検討していたところ、平成 12 年 6 月に植田南コミュニティセンターが開設されることになった。そして、「赤ちゃんルーム チルチル・ミチル」（以下「チルチル・ミチル」）を立ちあげた。

2. 活動内容

- 名古屋市から主任児童委員に提供される名簿により、対象世帯の把握をしている。転入してきた家族の情報も適宜提供されている。名古屋市は名簿を提供する条件として、複製の禁止、使用後の返還の厳守、名簿返却時には訪問記録を提出することを徹底している。
- 対象者には案内を配付している。案内した対象者のうち 5 割～7 割となる約 10 組前後の親子の参加がある。なお、活動に参加できない場合は、希望があれば主任児童委員が訪問し、子育ての様子や参加を促すなどのサポートをしている。
- 月齢が近い親同士で情報交換できるよう、誕生月に従って 3 か月単位でグループ分けをしている。各グループは月 1 回・火曜日の午前 10 時から 11 時 30 分に活動する。
- 活動当日、主任児童委員は赤ちゃんをあやすなど子どもの見守りを中心に活動する。参加した親同士で悩みや子育てに関する情報など気軽におしゃべりできる場

となるよう配慮している。最後は、主任児童委員が絵本の読み聞かせをしたりみんなで歌を歌ったりしている。

- 不定期ではあるが、地区担当保健師が「チルチル・ミチル」に参加し、親からの相談等に対して、適宜アドバイスを行っている。そのなかで、見守りが必要な親子の情報は主任児童委員とも情報共有をしている。
- 当初参加費は 100 円であったが、現在は初回のみ 200 円を徴収し通信費や印刷代、卒業会のおやつ代にあてている。
- 参加対象家庭が増えたため、はがき代など通信費等の支出が増えている。地区民児協は補助金として会場費を負担するなど活動を支援している。

3. 活動の効果

- 初めて母親となった人だけでなく、転勤で引っ越してきて、近隣に知り合いがいない人も、「チルチル・ミチル」に参加することで、同月齢の親子と知り合いになり孤立感の解消につながっている。
- 昨年まで主任児童委員 2 人で「チルチル・ミチル」の活動を運営していたため、負担が大きかった。令和元年度は主任児童委員が 1 人増員されたことで、シフトを組むことが可能となり、1 人の負担が減った。
- 今年度新しい試みとして、月齢が 1 番大きいグループの活動日に、「チルチル・ミチル」を卒業した 1 歳以上の親子や第 2 子の親子にも参加を呼びかけている。この試みは参加親子にとって大変好評である。
- 名古屋市のホームページの子育て応援サイト、各区の子育ての便利帳に「チルチル・ミチル」の活動が掲載されている。また主任児童委員が独自に Facebook で発信するなど、さまざまな手段で活動を周知している。参加している親の中には、これらの情報から子育てしやすい地域だと感じている人もいる。

4. 活動継続のための課題や今後の展望

- 今後参加者が大幅に増えた場合、1 グループの人数を増やすことも考えているが、現状の体制では対応が難しい。運営費用や活動体制の検討が必要である。
- 第 2 子や転入してきた 1 歳以上の親子、妊産婦をサポートする取り組みも必要であると感じている。その対象者の情報入手等についての検討も必要である。
- 転勤等で引っ越しをしてくる家族が多いということは、2～3 年で転出する親子も多いということである。市から情報提供を受けている対象者以外にも見守りが必要な親子がいると考えられる。いつでもアプローチできるような情報発信の方法を考えていく必要がある。

【ヒアリング調査のまとめ】

- 初めての子育てであったり、見知らぬ地域での生活が重なり、より不安を感じている親にとって、活動をとおして互いに顔見知りになり、仲間づくりができる、心強い取り組みであると感じた。また、主任児童委員が子どもを見守ることで、親同士も安心しておしゃべりできる場になっている。
- 活動が継続しているポイントは、市の「赤ちゃん訪問事業」と関連づけていることである。対象親子の把握や見守りが必要な家庭を事前に把握することにもつながっている。
- 参加対象者の増加に伴い、運営資金の補助や主任児童委員の増員に向けた行政への働きかけなど、民児協が主任児童委員活動の環境整備に取り組んでいることも活動の充実につながっている。

■活動事例２　安中市乳幼児宅訪問事業

【ヒアリング実施状況】

実施場所：　群馬県社会福祉協議会　会議室
実施日時：　令和元年 12 月 26 日（木）10:30～12:30
対 応 者：　安中市民生委員児童委員協議会　会長（会長歴 4 年目）
　　安中市主任児童委員　代表（経験年数 20 年目）
　　安中市保健福祉部福祉課社会福祉係　課長補佐
　　安中市保健福祉部福祉課社会福祉係　主任
実 施 者：　事務局 3 人

【事例に関する基本情報】

活動目的・内容	子育ての悩みや不安を抱える親を支えること、民生委員・児童委員活動の周知を図ることを目的に、主任児童委員と区域担当民生委員・児童委員が 0 歳～2 歳までの子どものいる家庭を訪問する事業。市内のさまざまな子育てに関する情報をまとめて配付している。
活 動 地 域	安中市全域
対　象　数	0 歳、1 歳、2 歳がいる全家庭（令和元年は 600 世帯）
活 動 場 所	対象者の自宅
活 動 状 況	年 1 回
活　動　者	民生委員・児童委員 165 人、うち主任児童委員 24 人
連　携　先	安中市役所
財　　源	安中市民生委員児童委員協議会　事業費

【安中市の民生委員児童委員協議会について】

名　　称	安中市民生委員児童委員協議会
委　員　数	民生委員･児童委員 165 人、うち主任児童委員 24 人

【ヒアリング内容】

1．活動のきっかけ･あゆみ

- 児童虐待による痛ましい事件をきかっけに、児童虐待の早期発見・予防をめざし、平成 13 年から毎年 10 月～11 月にかけて、0 歳～2 歳までの親子を対象にした「乳幼児宅訪問事業」（以下「訪問事業」）を実施している。
- 「訪問事業」の企画は安中市主任児童委員連絡会が中心となり進めている。
- 訪問事業を始めた当初、民生委員・児童委員を知らない親が多く、訪問を断られたこともあった。そこで、民生委員･児童委員、主任児童委員活動の周知を図るため、民生委員・児童委員の活動内容や氏名と連絡先（自宅の電話番号）を記載したリーフレットを作成し、訪問時に配付することにした。
- 最近では、安中市が実施している産前産後のホームヘルプサービス事業やＮＰＯ法人が運営しているファミリーサポートセンターの案内など、子育てに関連する情報の同封も依頼されるようになり、クリアファイルにまとめて配付している。

2．活動内容

- 安中市民児協事務局（安中市保健福祉部福祉課）は訪問対象となる 0 歳～2 歳の乳幼児家庭を抽出し、人数を主任児童委員連絡会に報告。なお、事務局は転入・転出の情報を定期的にチェックし名簿に反映させている。
- 主任児童委員連絡会は、実施に向けて訪問時に同封する資料の内容を検討する。特に各地区の子育て支援マップは最新の情報となるよう、随時更新を心がけている。
- 対象家庭の名簿は、市民児協事務局より単位民児協会長が受け取る。定例会で主任児童委員に引き継いでいる。そして、主任児童委員と区域担当民生委員・児童委員で訪問先の分担、訪問方法等について打ち合わせを行う。なお、訪問先名簿は活動終了後に必ず事務局に返却することを徹底している。
- 当日は、区域担当民生委員・児童委員 1 人と主任児童委員 2 人の計 3 人で各家庭を訪問し、子どもへのお土産（紙風船とガーゼのハンカチ）と子育てに関する資料を手渡しし、子どもや子育ての様子などを伺う。
- 令和元年度は、群馬県民児協の活動推進費を活用し、主任児童委員の発案で「子育て救急情報カード」を作成した。冷蔵庫に貼り付けて活用できるよう、民生委員・児童委員マークのシールを貼ったマグネットクリップと一緒に配付した。なお、来年度以降も継続する予定である。

- 市から民児協に交付された補助金（安中市民生委員児童委員協議会運営事業）の中から、主任児童委員に関する活動費として 15～20 万円を市民児協の事業費から支出している。

3．活動の効果

- 民生委員・児童委員は高齢者の見守り支援活動のため多忙となっている。しかし年に 1 回、民生委員・児童委員と主任児童委員が、担当地域の 0 歳～2 歳までの全乳幼児家庭を訪問することは、地域の乳幼児の状況把握につながっている。また、地域の親子と顔見知りになるきっかけになっている。
- 主任児童委員は乳幼児宅訪問の報告をまとめ、単位民児協会長へ報告書を配付することで情報共有が図れている。
- 主任児童委員同士の情報共有後、課題のある親子については市の保健師や関係各課（子ども課・健康づくり課）に情報をフィードバックし、その後の対応につなげている。

4．活動継続のための課題や今後の展望

- 安中市には 12 の地区民児協があり、主任児童委員は 1 地区に 2 人配置されている。しかし乳幼児数が 1 桁の地区があったり、逆に新興住宅地域では 100 人近い乳幼児がいたりと、地域によってバラつきが出ている。主任児童委員が活動しやすい人数配置の検討も必要である。
- 主任児童委員は仕事をしている人が多い。活動への参加に伴う調整など仕事と委員活動の両立や調整が難しい状況も見られている。
- 来年度多世代交流型の児童館がオープンする。これまで安中市には児童館がなかったため、今後は親子の居場所づくりなど、新たな子育て支援の取り組みを考えている。

【ヒアリング調査のまとめ】

- 訪問活動終了後に主任児童委員連絡会で、必ず活動の振り返りを行っている。訪問活動をとおして把握した家庭の状況等は、安中市民児協の理事会で報告することにより、各民児協会長、行政とも情報共有が図られている。
- 民生委員・児童委員が年に 1 回定期的に主任児童委員と共に活動することで、乳幼児のいる家庭の様子の把握や地域の親子とも顔見知りになるなど、児童委員活動への意識の高まりにつながっている。
- 単位民児協会長、主任児童委員、民生委員・児童委員、民児協事務局が役割分担をし、情報共有することで、それぞれが無理のない範囲で活動できる仕組みができている。
- 地域で役立つ子育て情報が集約され直接届くことは、子育て中の親にとって、安心感につながる取り組みである。

■活動事例３　SNS でつなぐ主任児童委員活動―親子支援―

～赤ちゃん同窓会、赤ちゃん訪問の実践から～

【ヒアリング実施状況】

実施場所：　草津市立市民交流プラザ
実施日時：　令和元年 12 月 25 日（水）14:00～16:00
対 応 者：　湖南市北地域民生委員児童委員協議会　会長（会長歴 1 年目）
湖南市主任児童委員　委員長（経験年数 13 年目）
湖南市民生委員児童委員協議会　会長
湖南市民生委員児童委員協議会　前会長
湖南市北地域民生委員児童委員協議会（菩提寺北学区）学区長
滋賀県民生委員児童委員協議会連合会　事務局
湖南市民生委員児童委員協議会　事務局
実 施 者：　泉谷委員、事務局 2 人

【事例に関する基本情報】

活動目的・内容	赤ちゃん訪問をした親子を対象に、未来に向けての同窓会を開催。招待状にＱＲコードを付けて出欠の返答をしやすくしたり、SNS を取り入れるなどの工夫をし、さらにその SNS を活用して児童委員活動の紹介を発信している。
活 動 地 域	赤ちゃん同窓会・LINE@は湖南市北地域菩提寺北学区 こんにちは赤ちゃん訪問等は湖南市全域
対象者・参加者数	前年度赤ちゃん訪問をした乳幼児親子 34 組
活 動 場 所	湖南市
活 動 状 況	Google および LINE による発信
活　動　者	主任児童委員
財　　源	湖南市民生委員児童委員協議会補助金

【菩提寺北学区の民生委員児童委員協議会について】

名　　称	湖南市北地域民生委員児童委員協議会（菩提寺北学区）
委　員　数	民生委員･児童委員 8 人、うち主任児童委員 1 人

【湖南市の民生委員児童委員協議会について】

名　　称	湖南市民生委員児童委員協議会
委　員　数	民生委員･児童委員 120 人、うち主任児童委員 9 人

【ヒアリング内容】

1．活動のきっかけ･あゆみ

- 菩提寺北学区では、湖南市 1 学区 1 活動推進に取り組むにあたり、赤ちゃん訪問活動をした乳幼児親子が孤立しがちであることから、親子が地域で横のつながりができるよう赤ちゃん同窓会開催の提案をした。
- 平成 30 年度の 1 年間に赤ちゃん訪問をした親子 34 組を対象に、赤ちゃん同窓会の招待状を作成するにあたり、参加の返事をしやすくするため、返信方法のひとつとして Google フォームを利用することにした。
- Google フォームを利用するきっかけは、まちづくり協議会の子ども食堂が Google フォームで出欠をとっていたことである。
- Google フォームは自動的に出欠の集計ができる点および、簡単な質問の回答も自動的に集計できる点が便利である。

2．活動内容

- 主任児童委員は赤ちゃん同窓会の招待状に､参加の回答法として Google フォーム、メール、ＳＭＳメッセージのＱＲコードとＦＡＸ番号をそれぞれ記載、また LINE ＠の公式アカウントを開設し、LINE＠の案内状も作成した。
- 主任児童委員が赤ちゃん同窓会対象の親子宅を訪問し、直接招待状を手渡し、返信方法を説明、LINE＠の案内を渡してお友だち登録をお願いした。
- その場で返答した以外の回答結果は Google フォームが 12 件、メールが 4 件、LINE ＠が 1 件であった。
- 赤ちゃん同窓会は参加者 15 組、欠席 4 組、転居等 7 組、返信なし 8 組であった。
- 同窓会では、保健師とともに身長体重測定やお話、お互いがつながれるようなゲームや自己紹介を行い、みんなでおやつを食べた。

- 同窓会で撮った集合写真と手形は後日アルバムにし、直接参加者宅を訪問して手渡した。
- 同時に、アンケート回収用のＱＲコードが入った参加お礼状を添え、アンケート回答の協力をお願いした。
- 赤ちゃん同窓会の費用は学区の予算でやりくりした。LINE＠や Google は無料である。
- 赤ちゃん同窓会後、湖南市の主任児童委員活動を紹介するために、Google フォームを活用して、主任児童委員、民生委員・児童委員の活動と、主任児童委員 9 人の写真と名前を掲載した「こんにちは赤ちゃん訪問」のホームページを作成した。赤ちゃん訪問のチラシにホームページにアクセスするＱＲコードを入れた。
- 令和元年 10 月 19 日の湖南市民児協主催「親子ふれあいの集い」のチラシに、イベントを紹介するホームページを作成し、ＱＲコードを入れた。

3. 活動の効果

- 赤ちゃん同窓会後の Google フォームからのアンケートの回答は 4 件だった。
- 赤ちゃん訪問のチラシは 4 か月前に配り始めたため、効果についてはまだ結果に結び付いていない。
- 児童委員が 2 人で親子宅を訪問しているが、宗教勧誘などに間違えられることが多い。ホームページを見てもらうことで、主任児童委員の存在をわかってもらえるため、アプローチにつながっている。
- LINE＠の登録者はまだ 23 人程度であるが、登録者から相談や情報等が届いている。LINE＠のツールは、時間を気にせずにお互い都合のいい時間にやりとりができるので、効果が期待できる。

4. 活動継続のための課題や今後の展望

- 若い母親にはＳＮＳツールは効果的な手段である。現状、登録者とは主任児童委員 1 人でやりとりをしているため問題はないが、今後展開していくにあたっては、セキュリティ問題や専門のサポート等が必要になってくる。
- 主任児童委員が替わるときに引き継ぐことができるかが課題である。
- 転入した親子にもアプローチしたいが、保健センターに問い合わせしたところ個人情報のため情報を提供してもらえない。
- 湖南市民児協のホームページを作成し、さらに広げていきたい。
- 主任児童委員が勉強した内容を民生委員・児童委員が教えてもらい勉強している。一歩ずつ取り組んでいきたい。

【ヒアリング調査のまとめ】

- 主任児童委員は若い親へのアプローチ手段としてＳＮＳの新しいツールに着目し、勉強しながら少しずつ情報発信をしており、民児協も主任児童委員が 1 人で取り組んでいることから個人的負担にならないようにバックアップしていることを感じた。
- 赤ちゃん同窓会の活動については、赤ちゃん訪問で主任児童委員と関わった親子同士をつなげる機会にし、子育て中の親子の孤立を防ぐ役割を担っていると思う。
- 赤ちゃん訪問のチラシにホームページのＱＲコードを付けて、湖南市の主任児童委員の顔写真と活動内容をスマホで簡単に見られるようにし、訪問者の顔がわかり安心につなげていることは、ＰＲの手段として非常によいと感じる。

■活動事例４　家庭訪問型子育て支援「ホームスタート・さくら」

【ヒアリング実施状況】

実施場所：　老人憩いの家千代田荘
実施日時：　令和元年 12 月 19 日（木）15:00～16:50
対 応 者：　千葉県佐倉市千代田地区民生委員児童委員協議会　会長
（主任児童委員経験年数 12 年、令和元年 12 月より地区民児協会長）
千代田地区民生委員児童委員協議会　前会長
千代田地区主任児童委員（経験年数 7 年目）
佐倉市福祉部社会福祉課地域福祉班　主査
実 施 者：　泉谷委員、事務局２人

【事例に関する基本情報】

活 動 目 的	主任児童委員が中心となり立ちあげた「家庭訪問型子育て支援『ホームスタート・さくら』」（以下「ホームスタート・さくら」）。孤立しがちな未就学児の親に寄り添い悩みを聞き、孤立感の解消や親の心の安定を図ることなどを目的とした子育て支援活動
活 動 地 域	佐倉市全域
対象者・利用者数	妊婦、未就学児の親・令和元年 12 月 1 日現在 62 人が利用
活 動 場 所	利用者宅
活 動 状 況	原則１利用者に対し、ホームビジターといわれる子育て経験があり、必要な講習を受講したボランティアが 4 回訪問を行い、子育ての悩みを聞いたり、一緒に食事を作ったり、買い物に行ったりしている。
活　動　者	千代田地区民生委員児童委員協議会の主任児童委員２人、民生委員・児童委員５人が活動に参加
連　携　先	佐倉市役所
財　　源	佐倉市補助金、パルシステム寄附金、 千代田地区民生委員児童委員協議会補助金

【千代田地区の民生委員児童委員協議会について】

名　　称	千代田地区民生委員児童委員協議会
委　員　数	民生委員･児童委員 16 人、うち主任児童委員 2 人

【ヒアリング内容】

1．活動のきっかけ･あゆみ

- 千代田地区民児協は、平成 20 年 10 月から学校を拠点とした「学校開放事業」に取り組んでいる。これは、当時の会長が高齢者支援だけではなく、単位民児協の重点事業の柱のひとつに子どもの見守り活動を打ち出したことがきっかけであった。区域内の小中学校の空き教室を活用し、住民も集える「地域開放ルーム」を設置。さまざまなサークルや講座を開催している。学校を拠点としたことで、住民、児童・生徒、教職員など世代を超えた交流の場となっている。
- 特に、不登校児童への対応や不審者対策、虐待の未然防止に向けた取り組みを進めるためには、学校との連携が不可欠である。年 3 回学校関係者と民児協（主任児童委員含む）との意見交換会を実施している。
- 一方、乳児家庭全戸訪問（こんにちは赤ちゃん事業）は保健師が中心となり実施していることもあり、民生委員・児童委員、主任児童委員が未就学児とその親に関わるきっかけの場が少なかった。
- 主任児童委員は、子育ての悩みや不安を抱えながら誰にも相談できない親を支えていきたいと、未就学児を対象とした活動を模索していた。平成 26 年に佐倉市児童青少年課担当者から家庭訪問ホームスタート事業（以下「ホームスタート事業」）を紹介され、主任児童委員 2 人で講習会に参加した。
- その後、行政からの勧めもあり、千代田地区主任児童委員 2 人と他地区主任児童委員 1 人の 3 人が中心となり、ＮＰＯ法人の活動の 1 つに組み入れる形で、平成 27 年 6 月に「ホームスタート・さくら」を立ちあげ現在に至っている。

2．活動内容

- ホームスタート事業は、6 歳未満の子どもがいる家庭を訪問し、子育ての悩みを聞いたり、母親と一緒に家事や育児をしたりする、家庭訪問型の子育て支援ボランティア活動である。オーガナイザーと呼ばれるコーディネーターと実際に訪問活動を行うホームビジター（子育て経験者・ボランティア）により実施されている。主任児童委員はオーガナイザーとして活動している。また、千代田地区民児協の民生委員・児童委員もホームビジターとして活動に携わっている。
- 訪問は原則 4 回で終了。訪問活動のほかに電話等による相談も行っている。

3．活動の効果

- 家庭訪問型の子育て支援であることから、子育て広場やサロンに参加できない親子にとって有効な支援である。また、活動者は地域の子育て経験者であることから、活動終了後も子どもの成長を見守り続けることができている。
- 民児協の事業計画に、「ホームスタート・さくら」の活動への支援・協力をかかげており、定例会では必ず活動報告の場を設けている。
- 千代田地区の高齢化率は令和元年 11 月現在で 31.5%。従来から高齢者支援活動に重きが置かれている状況にあった。学校開放事業や「ホームスタート・さくら」の活動をとおして、委員 1 人ひとりが地域の子どもや保護者が抱えている悩みに理解を示すようになった。
- ホームスタート事業は 1 自治体 1 事業であるため佐倉市全域が活動範囲となっている。「ホームスタート・さくら」の活動をとおして明らかになった課題の解決に向け、今後は他の地区民児協との連携も必要である。

4．活動継続のための課題や今後の展望

- 就業しながら民生委員・児童委員、主任児童委員活動を行うことに負担を感じる委員も多い。そこで、委員活動をサポートする仲間を増やすことは、負担軽減はもちろんのこと、子育ち、子育ての応援団が増えることにつながる。
- 今後は「ホームスタート・さくら」の活動と区域担当の民生委員・児童委員との連携のあり方の検討が必要である。
- 外国籍の住民が増えている。学習支援にも取り組んでいるが、今後どう地域でサポートしていくか検討していきたい。

【ヒアリング調査のまとめ】

- 千代田地区民児協は、10 年以上前から高齢者問題と同様に子ども、子育て支援活動にも力を入れている。小中学校の空き教室などを利用した「地域開放ルーム」の活動をとおして、小中学校関係者との連携状況は良好である。地域の子どもたちは地域で見守るという思いが民児協内で築きあげられている。
- 「ホームスタート・さくら」の活動を立ちあげる際、主任児童委員が単位民児協会長に相談したことで、民児協の事業計画に位置づけられた。定例会で報告の場が設けられるなど、委員 1 人ひとりの活動に対する理解にもつながった。
- 活動費の一部を支援することや、民生委員・児童委員が活動に参加することなど、民児協として「ホームスタート・さくら」の活動に対するバックアップ体制が図られている。

- ホームスタート事業はさまざまな団体等が取り組んでいるが、主任児童委員が関わる効果は、地域の状況を把握していること、身近なおとなとしての強みを生かし、活動終了後も利用者を継続して見守ることが可能なことがあげられる。
- 「ホームスタート・さくら」の活動をとおして見守りが必要な家庭や、虐待が疑われるケースは、利用者了解のもと行政につないでいる。個人情報の取り扱いを含め、行政と連携して、継続的な見守りが必要なケースでは、今後、区域担当民生委員・児童委員が関わることができる仕組みづくりの検討も必要である。

■活動事例５　土曜日の子どもの居場所づくり「香住っ子ひろば」

【ヒアリング実施状況】

実施場所：　香住丘公民館
実施日時：　令和元年 12 月 7 日（土）14:30～16:30
対 応 者：　東区第 6 区香住丘民生委員児童委員協議会　会長（会長歴 6 年目）
東区第 6 区香住丘主任児童委員（経験年数 13 年目）
香住丘校区青少年育成連合会　会長
香住丘校区青少年育成連合会　副会長
香住丘公民館　館長
香住丘地区社会福祉協議会　会長
実 施 者：　事務局 2 人

【事例に関する基本情報】

活動目的・内容	完全学校週 5 日制に伴い土曜日の子どもの居場所づくりを目的に、公民館で毎月 2 回、土曜日に小学生を対象に地域の団体や機関と協力し、さまざまなイベントを企画・実施している。
活 動 地 域	福岡市東区香住丘校区
対象者・参加者数	小学生 43 人
活 動 場 所	香住丘公民館
活 動 状 況	毎月 2 回　土曜日 10 時～15 時
参　加　費	500 円/月
活　動　者	主任児童委員 2 人、青少年育成連合会 7 人、民生委員・児童委員 8 人、公民館 2 人、社会福祉協議会 3 人、地域サークル・有志、大学 2 校の学生ボランティア
連　携　先	地区社会福祉協議会、区、校区内サークル、大学、子ども会育成連合会
財　　源	青少年育成連合会および自治協議会、校区社会福祉協議会からの補助金、地域の寄付

【香住ヶ丘地区の民生委員児童委員協議会について】

名　　称	東区第 6 区香住丘民生委員･児童委員協議会
委　員　数	民生委員･児童委員 25 人、うち主任児童委員 2 人

【ヒアリング内容】

1. 活動のきっかけ･あゆみ

- 平成 14 年 4 月からの完全学校週 5 日制の実施をきっかけに、子どもたちの土曜日の居場所づくりについて地域と家庭、学校とで話し合った。その結果、校区内の有志、ボランティアを中心に「香住っ子ひろば」実行委員会を立ちあげ、ボランティアを募集。平成 14 年 4 月、子どもとボランティア 100 人以上が参加し発会式を実施。7 月には、保護者会が発足した。当時は毎週土曜日に開催し、参加費は 1 回 100 円または米 1 合とし、費用の不足分は地域の団体・個人から寄付を募った。
- 平成 26 年 4 月、公民館建て替えのため「香住っ子ひろば」を閉会した。
- その後、保護者から再開を望む声が寄せられたことから、主任児童委員、公民館館長が中心となり活動再開に向けて話し合いが行われた。継続的に活動の運営が可能な地域の団体を検討した結果、香住丘校区青少年育成連合会に運営を依頼した。
- 平成 27 年 5 月公民館の建て替え工事が終了し、香住丘校区青少年育成連合会が運営主体、香住丘公民館が共催となり、新たな「香住っ子ひろば」がスタートした。
- 大学生や「香住っ子ひろば」を卒業した中・高校生や地域のボランティアも増え、レクリエーションやスポーツなど活動内容も広がりを見せている。

2. 活動内容

- 現在の「香住っ子ひろば」は、月 2 回、土曜日の 10 時～15 時、さまざまな遊びやスポーツ、七夕会や餅つき大会など四季折々のイベントを地域の団体等と連携し、実施している。ボランティアによる手作りの昼食を子どもたちは楽しみにしている。
- 参加費は月 500 円とし、青少年育成連合会や自治協議会、地区社会福祉協議会からの補助金や地域からの寄付金で運営している。なお、参加にあたりスポーツ保険への加入をお願いしている（保護者負担）。
- 現在の参加者は 43 人。スタッフ体制との関係から新規参加については個別相談によって受け付けている。
- 校区内の大学 2 校と連携し、大学生がボランティアとして参加している。
- 「香住っ子ひろば」の活動は、遠足や見学会など運営主体による開催行事のほか、年 2 回地区社会福祉協議会主催の高齢者との夕食会や餅つき大会、校区内サーク

ル団体による茶道教室、体育館でのスポーツ体験など、さまざまな関係機関・団体とコラボレーションした企画も行っている。

- 主任児童委員は企画・運営に携わり、民生委員・児童委員は、ボランティアとともに食事やおやつ作り、子どもたちの見守りや相談相手となっている。

3. 活動の効果

- 青少年育成連合会が運営母体となり安定した活動ができるようになった。
- 年間計画を立てることで、事前に取り組み内容を検討するなど見通しをもった活動が可能となっている。
- 核家族やきょうだいが少ない家庭も多く、異年齢で交流する機会が減っている。子どもたちは、「香住っこひろば」の活動や行事をとおして学年を越えた交流により、年下の子をいたわったり、友だちと助けあったりすることを学んでいる。また、大学生とのレクレーションや季節の行事など多種多様な活動を経験することで、地域のさまざまな人とふれあい成長している。
- 「香住っ子ひろば」を卒業した中学生・高校生が、ボランティアとして活動に参加している。
- 働いている保護者にとっては、「香住っ子ひろば」に子どもを預けることは安心感につながるだけではなく、さまざまな経験をとおして子どもの成長する姿に活動の意義を見出している。子育てに不安を感じている保護者は、その場で主任児童委員に相談することもできる。また、保護者も食事作りのボランティアとして参加している。
- 大学生に対しては、事前に活動の意味や子どもと関わるうえでの注意点をしっかりと伝えている。学生は子どもたちとの交流から、多くの気づきを得ている。また、「香住っ子ひろば」だけではなく、地区社会福祉協議会が実施する地域カフェで似顔絵のボランティアに携わるなど、活動の場を広げる学生もいる。
- 主任児童委員は公民館がもつ地域のネットワークを活用し、さまざまな機関・団体とつながることで、バラエティに富んだ活動が可能となっている。
- 子ども会育成連合会など地域で活動する団体が「香住っ子ひろば」とコラボレーションして活動を行うことで、子どもと顔見知りとなり、地域全体で子どもを見守る体制づくりへとつながっている。

4. 活動継続のための課題や今後の展望

- 主任児童委員が交替したとき、活動を維持・継続できるのか。特に仕事をしている委員が増えており、両立が難しいとの意見もある。
- 参加希望者が増えているが、スタッフ体制、運営費用の面から現状では要望に応えることが難しい。
- 「香住っ子ひろば」に参加する子どもも時代とともに変化し、現在は発達障がいのある子どもなど関わり方が難しい子どもが増えている。保護者との連携も必要である。
- 今後は、多くの機関・団体がそれぞれの強みを生かし、「香住っこひろば」の活動に協力していただくことで、民生委員・児童委員、主任児童委員の負担の軽減につなげていきたいと考えている。

【ヒアリング調査のまとめ】

- 「香住っ子ひろば」の活動が長く続いている理由のひとつに、主任児童委員が中心となり、地域のさまざまな機関・団体など社会資源を活動にうまく結び付けていることにある。
- お互いに何でも相談しあえる関係性を築くことで、無理なく活動に関われている。また、参加する子どもたちはもちろん、協力するおとなも楽しいと感じていることも継続のポイントである。
- 主任児童委員が、無理せず活動を続けていくために、地域のさまざまな人に活動に協力していただこうと考えた。そこで、地域活動の要となっている香住丘公民館の館長に相談した。公民館がもっている地域のネットワークを駆使し、「香住っ子ひろば」の活動協力者を見出している。そのことが、多様な活動内容を可能としている。
- 10 年以上前から主任児童委員と小学校・中学校との報告会を定期的に実施している。また、スクールソーシャルワーカーの校区への設置を、かなり早い時期から民児協として行政に要望。現在は 1 中学校に 1 人配置されている。見守りが必要な子どもへの対応は、スクールソーシャルワーカーに相談する体制ができている。家庭の状況など適宜情報提供するなど、双方向に情報共有できる関係性ができている。必要に応じて区域担当民生委員・児童委員には見守りを依頼するなど、関係機関とのつなぎ役としての取り組みを進めている。

■活動事例６　退所児童無料学習塾「ひだまり」

【ヒアリング実施状況】

実施場所：　中本老人憩いの家、リアン東さくら
実施日時：　令和元年 11 月 30 日（土）14:30～16:30
対 応 者：　東成区民生委員児童委員協議会　会長（会長歴４年目）
東成区中本地区主任児童委員（経験年数 11 年目）
リアン東さくら　施設長
大阪市民生委員児童委員協議会　事務局長
東成区民生委員児童委員協議会　事務局担当者
実 施 者：　事務局４人

【事例に関する基本情報】

活動目的・内容	母子生活支援施設退所後の子どもや地域の子どもたちを地域で育むことを目的に、毎週土曜日に地域の公民館を借り、学習支援活動を実施。学習指導は主に社会人・学生ボランティアと施設職員が担当している。主任児童委員、民生委員・児童委員は食事作りや遊び相手になるなど活動をサポートしている。
活 動 地 域	大阪市東成区中本地域
対象者・参加者数	小学生７人、中学生６人、高校生４人　計 17 人 （うち、地域児童４人）
活 動 場 所	中本老人憩いの家
活 動 状 況	毎週土曜日、13 時 30 分～16 時 30 分
活　動　者	主任児童委員２人、民生委員・児童委員４人、 リアン東さくら職員４人・実習生１人、 大学生ボランティア６人、社会人ボランティア１人
連　携　先	フードバンク（食材提供）、大阪市社会福祉協議会 大阪市ボランティア市民活動センター
財　　源	社会福祉協議会ボランティア助成金

【中本地区の民生委員児童委員協議会について】

名　　称	中本地区民生委員児童委員協議会
委　員　数	民生委員･児童委員 9 人、うち主任児童委員 2 人

【ヒアリング内容】

1. 活動のきっかけ･あゆみ

- 母子生活支援施設のリアン東さくらでは、退所した子どもたちを継続して見守るなかで、保護者から学習支援をしてほしいというニーズがあった。また地域には、虐待や貧困など支援が必要な子どもたちも多く、地域の関係者とともに、子どもたちを見守る活動ができないだろうかと、施設長より主任児童委員に相談があった。
- 主任児童委員は民児協会長に相談した。会長からは「無理なく長く続けていく」という方針により、各委員に協力を働きかけた。
- 活動場所を検討した結果、退所した親子も地域で生活していくことや、地域の関係者や住民の人にも活動に参加し、子どもたちを見守ってほしいという施設長の願いから、地域の公民館で実施することにした。
- 運営は、リアン東さくらと中本地区民児協との協働事業とした。
- 平成 26 年 4 月、無料学習塾「ひだまり」を開設した。
- 活動日は、毎週土曜日　13 時 30 分から 16 時 30 分としている。民生委員・児童委員とリアン東さくらとの協働事業として運営している。
- 子どもたちが 1 人で食事をしていることや、十分な食環境にない状況から、月に 1 回手作りの昼食を用意することにした。

2. 活動内容

- 「ひだまり」の運営上の役割分担は、リアン東さくらの職員が全体のコーディネーターの役割を担っている。ボランティアの受け入れや、社会人・大学生の学習指導に対する支援は、施設職員が行っている。主任児童委員、民生委員・児童委員は当日の食事やおやつ作りや子どもたちの話し相手となっている。
- 現在、2 人の主任児童委員と 4 人の民生委員・児童委員が「ひだまり」に関わっている。活動をとおして支援が必要な子どもなど、見守りが必要なことがあれば、施設や学校と情報共有している。
- 大学生ボランティアは、リアン東さくらに教育実習で学習支援に関わったことがきっかけとなり、その後もボランティアとして継続して参加している。
- リアン東さくらは施設運営のソーシャルワークを生かし、子どもの関わり方やボランティアの受け入れなどについて、適宜調整している。活動終了後には、学生も

交えた反省会を実施している。その場で活動上困ったことなどについて相談できる体制になっている。

- 運営の財源は、大阪市社会福祉協議会の助成金を活用している。主に備品、教材、公民館使用料、有償ボランティア謝金等にあてている。食材はフードバンクからの支援である。

3. 活動の効果

- 1 対 1 で子どもの学習を見る体制ができたことで、勉強に集中できている。希望した高校に合格するなど、子どもたちも支えているボランティアも達成感を味わい、やりがいにつながっている。
- 「ひだまり」には通うことができている不登校の子どももいる。主任児童委員は、学校や家庭とも連携をとりながら、子どもの成長を見守っている。
- 毎回活動終了後学生ボランティアに対して、反省会の時間を設けている。活動上の困りごとなど、振り返りの時間をもつことで、子どもへの理解が深まっている。
- 母子生活支援施設を利用している親子のうち、約 7 割がＤＶ、虐待である。
- 退所後も住み慣れた地域で生活することが多い。「ひだまり」の活動をとおして彼らに安心安全な環境が提供できている。
- 「ひだまり」の活動によって、地域からは、民生委員・児童委員が子どもに関わる活動もしていることが理解されるようになった。
- 関係団体等が一堂に会し、「ひだまり」学習支援活動の振り返り会議に、学校、行政関係者も参加し、退所した子どもや課題を抱える子どもの情報を共有し、地域全体で子どもの見守りができるようになった。
- 母子生活支援施設と連携することで、施設の存在や役割の理解が広がった。

4. 活動継続のための課題や今後の展望

- 民生委員・児童委員が交替しても活動を継続できるよう、施設と話し合いながら、無理なく続けるための体制づくりを考えていかなければならない。
- 安定して運営できるための運営資金の確保が必要である。
- 親を支えることは子どもを支えること、地域とつながることであるため、地域の親をサポートする必要性がある。

【ヒアリング調査のまとめ】

- 活動当初、子どもにどう話しかければよいかなど、関わり方が難しいと感じる委員も多かった。施設職員のアドバイスにより、少しずつ解消されていき、よい関係を築くことができている。また、子どもにとって、親や施設職員以外の頼れるおとなの存在は、安心感につながっている。
- 民児協と母子生活支援施設とが学習支援活動に協働で取り組んでいる事例である。主任児童委員、民生委員・児童委員、母子生活支援施設、ボランティアの学生がそれぞれ役割を分担することで継続した活動になっている。
- 民児協と施設との協働事業は、地域の公民館を拠点にしたことで、施設を退所した子どもばかりではなく、その地域に住む子どもも受け入れ、地域の子どもたちを地域で支援する仕組みをつくっている点が、協働事業の成功につながっていると思われる。

■活動事例７　川上小学校サマースクール、乳幼児と中学生のふれあい交流会

【ヒアリング実施状況】

実施場所：　熊本県民交流館パレア　会議室
実施日時：　令和元年 12 月 23 日（月）14:00～16:20
対 応 者：　城北校区民生委員児童委員協議会　会長
（会長歴 10 年目、経験年数 27 年目）
川上校区民生委員児童委員協議会　会長（主任児童委員）
（会長歴 7 年目、経験年数 16 年目）
城北校区民生委員・児童委員（経験年数 13 年目）
城北校区主任児童委員（経験年数 10 年目）
実 施 者：　泉谷委員、事務局 2 人

1　川上小学校サマースクール

【事例に関する基本情報】

活動目的・内容	夏休み期間中の子どもたちの「居場所づくり」や「学力の向上」を目的に、自主学習の場として教室を開放する際の監督を小学校から依頼され、民生委員・児童委員が期間中交代で参加者の出欠管理や学習補助を行っている。
活 動 地 域	熊本市北区川上校区
対象者・利用者数	小学 1 年生～6 年生　延べ 3,200 人（令和元年度）
活 動 地 域	川上小学校　教室
活 動 状 況	夏休み期間中 19 日間　午前 9 時 30 分～11 時 30 分
活　動　者	主任児童委員 2 人 民生委員・児童委員 15 人
連　携　先	川上小学校
財　　源	川上小学校全負担

【川上校区の民生委員児童委員協議会について】

名　　称	川上校区民生委員児童委員協議会
委　員　数	民生委員・児童委員 17 人、うち主任児童委員 2 人

【ヒアリング内容】

熊本市の取り組みについて

- 熊本市は、子育て支援体制の強化のために小学校区ごとに子育て支援ネットワークが設置されている。子育て支援ネットワークは、校区の子育てに関係する機関・団体の代表が集まり、子育ての現状や課題、それぞれの活動について情報共有し、連携・協働できるよう、校区が一体となって子育て支援に取り組むことを目的としている。さらに区ごとの連絡会が組織されており、市全体で子育て支援ネットワークを活用した子育て支援の活性化をめざしている。民児協は子育て支援ネットワークのメンバーであり、特に主任児童委員は運営の要の役割を果たしている。
- 北区子育て支援ネットワーク連絡会では、実務者会議（毎月）および全体会（年 1 回）を開催し、各校区の活動報告や課題・支援策について協議を行っている。

1．活動のきっかけ・あゆみ

- 川上校区民児協には、子育て支援ネットワーク「まなざしねっと川上」が設置されている。
- 川上校区民児協は子育て支援ネットワーク活動の 1 つとして、民児協（会長、副会長、主任児童委員）と小学校（校長、教頭や養護教諭、クラス担当職員等）とが情報交換・共有し、支援策等の協議を行う「子どもサポート会議」を毎月 1 回開催している。
- 平成 30 年から「子どもたちの居場所づくり」を目標の 1 つに掲げており、川上小学校長より夏休み期間中の子どもたちの自主学習の場として、教室を開放する「サマースクール」の実施について提案があった。民児協としては、夏休み期間中の子どもたちの居場所ができること、子どもたちが地域とつながることができること、民生委員・児童委員と子どもたちの関係づくりができる等の意見が合致したため、協力することを決めた。
- 平成 30 年度から夏休みに開催する「サマースクール」が始まり、2 年目の令和元年度は 19 日間実施した。

2. 活動内容

- 民生委員・児童委員の役割は、「サマースクール」に参加する子どもたちの出欠管理や学習補助である。
- 主任児童委員は、事前に小学校から民児協に提出された子どもの参加リストと民生委員・児童委員の活動希望日をもとに、1 人平均 2～3 日を担当するシフト表を作成し、事前準備をする。
- 「サマースクール」当日、民生委員・児童委員は、子どもたちと朝の挨拶後に身だしなみチェック、出欠確認し、子どもにその日の学習目標をカードに記入してもらう。自主学習の開始後は子どもたちの監督および学習補助をし、終了後はカードに振り返りを記入させるなどが主な活動である。
- 「サマースクール」終了後、9 月の定例会議で、「サマースクール」の活動報告を行い、課題を共有している。その後、さらに小学校と意見交換を行い、課題解決に向けた検討を行い、来年度の運営に生かしている。

3. 活動の効果

- 民児協と小学校とで定期的に開催する「子どもサポート会議」を長年継続していることで、校長が替わっても民児協と小学校との信頼関係を継続させることができている。
- 民児協内の委員は、「サマースクール」活動に参加することで、それぞれが子どもと顔見知りになり、学校以外でも声をかけあえる関係を築くことができたことで、活動のやりがいを感じている。
- 参加した子どもたちをとおして、保護者とも顔見知りになることができ、地域のなかで民生委員・児童委員の存在の周知につながった。
- 子どもが夏休み期間中にきちんと学校に行き、計画的に宿題も終わらせるなど、規則正しい生活を送ることができた。他校の親からうちの学校でもやってほしいという希望があった。
- 不登校気味の子どもが「サマースクール」には通うことができた。また夏休み明けの子どもの登校率が上がった。

4. 活動継続のための課題や今後の展望

- 子育て支援ネットワークは、校区内の子育てに関係する機関・団体、行政機関等、関係機関を網羅する構成で設置されている。さらに川上校区民児協は小学校と毎月 1 回、「子どもサポート会議」で情報共有や課題解決を継続している。
- 民児協として、主任児童委員と民生委員・児童委員で、役割分担し、互いに連携できるように、取り組んでいるところである。
- 子どもの課題は複雑化・複合化しているため、民児協単体で支援活動を行うのではなく、関係機関と連携・協働し、より効果的な支援活動としていきたい。

【ヒアリング調査のまとめ】

- 「サマースクール」活動の背景には、校区に子育て支援ネットワークが設置され、そのなかで学校と「子どもサポート会議」を定期的に開催していることで、学校と信頼関係がすでに構築されていることが大きい。
- 信頼関係に基づく小学校との連携から、主任児童委員、民生委員・児童委員が学校にとってよきサポーター・パートナーとして位置づけられている。
- 子どもが地域のなかで認識されなくなり、それがコミュニティや人間関係の希薄化につながっているという危機感がある。その解決には子どもの居場所づくりが必要であり、「サマースクール」が夏休みの子どもの居場所となっている。

2　乳幼児と中学生のふれあい交流会

【事例に関する基本情報】

活動目的・内容	少子化等により中学生が乳幼児とふれあう機会がなくなっていることから、地域の乳幼児親子と中学生がふれあうことを目的に、毎年中学 3 年生の全生徒を対象に、クラスごとに乳幼児親子との交流会を実施している。
活 動 地 域	熊本市北区城北校区
対象者・参加者数	中学 3 年生　全生徒 506 人（令和元年度）
活 動 地 域	清水中学校教室
活 動 状 況	年 1 回、中学 3 年生の各クラス 1 回ずつ、1 時間 30 分
活　動　者	1 開催につき 主任児童委員 2 人、民生委員・児童委員 8 人程度 乳幼児の親子　6 組程度
連　携　先	清水中学校、保健師
財　　源	校区社会福祉協議会補助金

【城北校区の民生委員児童委員協議会について】

名　　称	城北校区民生委員児童委員協議会
委　員　数	民生委員･児童委員 13 人、うち主任児童委員 2 人

【ヒアリング内容】

1．活動のきっかけ･あゆみ

- 少子化により、中学生が乳幼児にふれあう機会が少ないことから、子どもに命の大切さを知ってほしいと感じていた。すでに実施している他の民児協の活動を見学し、自分の地域でも交流会活動を開催したいと考えた。
- 平成 25 年主任児童委員は、まず校区にある清水中学校校長に相談し、校長の承諾をもらったうえで、地区民児協会長に相談。民児協のバックアップのもと、ふれあい交流会を立ちあげた。

- 交流会に参加してもらう乳幼児の親子は、主任児童委員の赤ちゃん訪問活動や月 1 回開催している子育てサークルなどでアンテナを張り、2 歳～3 歳までの乳幼児親子に声かけをし、交流会への参加依頼をした。
- ふれあい交流会は、校区にある清水中学校の 3 年全生徒を対象に、クラスごとに 2 歳～3 歳までの乳幼児の親子と交流をすることで、小さな命に向きあい、命の大切さに気づくことを目的にした。

2. 活動内容

- ふれあい交流会では、保健師の指導のもとに中学生は妊婦体験ジャケットを着用して妊婦体験をしたり、グループごとに乳幼児の親子を囲んで交流したりしている。また、保健師は乳幼児人形を持参し、赤ちゃんの抱っこの仕方などを教えている。
- 当日の司会は、主任児童委員が担当しているが、活動が始まると参加している親に進行をお願いし、適宜サポートしている。中学生も主体的に保護者に質問する姿が見られる。民生委員・児童委員は受付等の運営のサポートと、各グループ 2 人ずつ入っている。
- 中学 3 年生全生徒が交流するために、クラスごとに開催し、1 年かけて全クラスで実施している。
- 学校は交流会を家庭科の授業の一環として実施。当初は 1 時限であったが、現在は 2 時限分の 1 時間 30 分をあてている。
- 参加するのが乳幼児のため、安全を第一に考慮し、事故防止の面から保険に加入している。また乳幼児の親に協力のお礼として、主任児童委員からのメッセージと謝礼を渡している。

3. 活動の効果

- 乳幼児とふれあう機会がない生徒が多く、最初はおっかなびっくりでも、抱っこしたり遊んであげたりするうちに、次第に授業では見慣れない顔つきになっていくことが、先生には新たな発見となっている。
- 中学生は妊婦体験や乳幼児とのふれあい、母親から出産や子育ての話を聞くことで、自分の親に対する感謝の気持ちがうまれているようである。
- 参加した母親は交流会で妊娠から出産、子育てについて話すことにより、あらためて自らの子育てを振り返り、子どもへの思いを強くすることにつながっている。複数回参加する親子もあり、親にとってはリフレッシュの場になっているようである。
- 乳幼児の親の中には、中学校の卒業生の姿も見られ、子どもとの交流がさらに広がっている。
- 民生委員・児童委員はふれあい交流会をとおして、地域の中学生と関わることができ、その後の見守り活動にもつながっている。

４．活動継続のための課題や今後の展望

- 中学校は「中学生にとって大変よい授業である」と継続を希望している。継続のための安定した財源を検討していかなければならない。
- 母親の職場復帰の時期が早まっていることから、参加可能な親子の呼びかけが難しくなっている。

【ヒアリング調査のまとめ】

- 中学生と乳幼児の親子とのふれあい交流会の実施には、中学校、民児協、市の地区担当保健師、参加の親子など、さまざまな関係機関等の協力・連携が必要である。城北校区の子育て支援ネットワークが設置されていることで活動の連携や協力がスムーズになっている。
- 「ふれあい交流会」の継続のポイントは、民児協が中学校のよきサポーター・パートナーであること、また、中学校の家庭科の授業に活動が位置づけられていることにある。
- 中学生にとっては、乳幼児とふれあい、子育ての話を聞くことで、自分の親に感謝するとともに、命の大切さを学ぶ場となっている。乳幼児の親にとっては、あらためて、自身の子育てや子どもの成長を振り返る機会となっている。また地域の中学生と顔見知りになるなど、それぞれによい影響をもたらす活動である。

■活動事例８　早通子ども食堂「ひまわり食堂」

【ヒアリング実施状況】

実施場所：　早通健康福祉会館
実施日時：　令和２年１月21日（火）13:30～15:30
対 応 者：　豊栄早通地区民生委員児童委員協議会　会長（会長歴９年目）
豊栄早通地区主任児童委員（経験年数12年目）
豊栄早通地区主任児童委員（経験年数５年目）
新潟市民生委員児童委員協議会連合会　担当２人
実 施 者：　泉谷委員、事務局２人

【事例に関する基本情報】

活動目的・内容	ひとり親家庭の子どもなどに月 2 回昼食を提供するなど、子どもの居場所づくりを行っている。ひとり暮らし高齢者や中高年齢層のひきこもりの方などにも、参加を呼びかけるなど、多世代交流の場をめざしている。
活 動 地 域	新潟市北区豊栄早通地区
対象者・参加者数	小学生から高齢者まで 50 人
活 動 場 所	早通健康福祉会館
活 動 状 況	第 2･第 4 土曜日 10 時～12 時 30 分 ただし、8 月、1 月、2 月を除く
参　加　費	高校生以下 100 円、おとな 300 円、大学生ボランティア 100 円
活　動　者	主任児童委員 2 人、民生委員･児童委員 3 人 自治会連合会 1 人、地域教育コーディネーター2 人 地域コミュニティ協議会 1 人、老人会 1 人、住民 5 人、 調理ボランティア 14 人
連　携　先	コープにいがた、フードバンクにいがた
財　　源	新潟市地域活動補助金、地区民生委員児童委員協議会補助金、住民の寄付

【豊栄早通地区の民生委員児童委員協議会について】

名　　称	豊栄早通地区民生委員児童委員協議会
委　員　数	民生委員･児童委員 14 人、うち主任児童委員 2 人

【ヒアリング内容】

1．活動のきっかけ･あゆみ

- 共働き家庭やひとり親家庭が比較的多い地域であることから、子どもが夜ご飯を 1 人で食べていたり、夏休みの昼食も公園でお弁当やお菓子を食べたりするなど十分でない状況が見られた。主任児童委員は子どもたちが安心して、楽しく食事ができる場の必要性を感じていた。
- 平成 28 年、主任児童委員 2 人が中心となり、早通地区民児協、早通地区自治会連合会、早通地域コミュニティ協議会、地域教育コーディネーター、老人会など 17 人が参加して、子ども食堂運営委員会を立ちあげた。(※地域教育コーディネーターについては下記参照)。
- 主任児童委員が地域教育コーディネーターをしていたことから、小学校とも情報共有し、子ども食堂について意見を聞きながら準備を進めた。
- 同時期に、早通地区が新潟市のふれ愛ネットワークのモデル事業の指定を受けた。早通地域コミュニティ協議会と早通地区自治会連合会が全世帯を対象としたアンケートを実施。社会的孤立を防ぐ仕組みや多世代が交流できる拠点づくりなどを求める声があがった。そこで、「自分たちで健康を守り、多世代が交流できる複合拠点」をめざし、市からの助成金のほか、地域住民や企業から募金を集め、早通健康福祉会館が建設された。
- 話し合いの結果、子ども食堂も早通健康福祉会館で実施することになった。会館は、木造 2 階建てで、約 100 人収容できる大広間や、大人数に対応可能な調理室を備えている。また、高齢者への配食サービスのボランティアに、調理スタッフとして協力を依頼した。
- 平成 29 年 4 月、早通健康福祉会館の開館と同時に、早通子ども食堂「ひまわり食堂」がオープンした。

※地域教育コーディネーターは新潟市が独自に制定、学校と地域をつなぐ役割を担うことを目的に、地域住民から地域教育コーディネーターを選び、全小中学校に配置している。

2．活動内容

- 子ども食堂は第 2、第 4 土曜日の 10 時から 12 時 30 分まで開催。定員は 50 人。予約制ではなく当日受付で整理券を配布。2 回に分けて食事を提供している。参加対

象は、高校生以下の子どもが中心であるが、高齢者や中高年齢層のひきこもりの方などにも声をかけている。

- コープにいがた、フードバンクにいがたから定期的に食材提供がある。その他住民や店舗などからも寄付がある。
- 民生委員・児童委員は、提供される食材を車で取りに行くことと当日の受付や配膳、子どもの遊び相手などを担当している。
- 保護者から子ども食堂利用同意書による承認を得て、アレルギー食への対応はしていない。
- 要保護児童対策地域協議会と配慮の必要な子どもの情報を共有している。
- ボランティア保険、イベント保険、生産物賠償責任保険、食中毒利益保険に加入している。
- 主任児童委員が小学校に子ども食堂のチラシを 650 部配布。また地域コミュニティ協議会の会報（毎月、地域の全 4,000 世帯に配布）に誰でも参加できる場であることをＰＲし、子ども食堂の利用を働きかけている。

3. 活動の効果

- 地域の課題は地域で解決することをめざし、さまざまな講座やイベントが健康福祉会館で実施されている。子ども食堂は地域全体にＰＲすることで、中高年齢層のひきこもりの方、認知症高齢者、障がいのある人など、地域から孤立しがちな住民が参加する多世代交流の場となっている。
- 子ども食堂に参加することで、子どもは地域のさまざまな人とふれあうことにつながっている。親以外のおとなと顔見知りになるなど、子どもを見守るネットワークの強化にもつながっている。
- 小学校の校長、教頭、担任の先生も子ども食堂に参加し、活動に対する理解を深めていただいている。子どもの姿を共有し必要に応じた情報交換につながっている。

4. 活動継続のための課題や今後の展望

- 子ども食堂の運営は、事前準備の負担が大きく月 2 回以上の実施は難しい。現時点では、子どもや高齢者の食事改善にはつながっていない。
- 子ども食堂の運営への協力者をさらに地域に増やしていく必要がある。
- 新潟市地域活動補助金は今年度で終わるため、それに代わる安定した資金確保が必要である。

【ヒアリング調査のまとめ】

- 早通健康福祉会館は、地域住民が運営している施設である。ここでは子育てサロンから高齢者のデイルームまで、地域の全世代が交流できる場となっている。そのことも子ども食堂を多世代交流につなげやすくしている。
- 早通健康福祉会館が地域コミュニティの拠点となっており、子ども食堂実行委員会も民児協をはじめ各地域の団体で構成されていることが、継続的な運営につながっている。
- 新潟市独自の制度である地域と学校をつなぐ地域教育コーディネーターを主任児童委員が兼ねていることで、学校との信頼関係のもと、子ども食堂に対する学校の理解と協力につながっている。また、見守りが必要な家庭の情報も共有できるため、虐待の未然防止につながっている。
- 中高年齢層のひきこもりの方やひとり暮らし高齢者などにも対象を広げたことで、地域で孤立しがちな方も集える場となっている。例えば、ひきこもりの方が、子どもたちにマジックを披露したことがあった。自宅を出てみんなと食事を摂ることが、子どもたちと一緒に食べることや遊ぶことにつながり、同じ地域に一緒に暮らす多世代交流が深まっていった様子を聞き取ることができた。緩やかな役割をもって地域とつながることができる場に育つことが期待される。

3 ヒアリング調査のまとめと考察

児童委員活動等の状況に関するヒアリング調査は、調査研究委員会において、Ａアンケート調査およびＢアンケート調査の結果を踏まえた特徴的な活動、および委員の推薦から８つの活動事例を選び、現地で実施している。

ヒアリング調査当日は、主任児童委員、民児協会長、活動の関係者に集まっていただき、活動事例についてインタビューを行った。

８ つの活動事例のヒアリング調査からは、児童委員活動を立ちあげる時やそれらの活動を継続していくための４つの要因が見えてきた。

第１には、主任児童委員は児童委員活動に取り組もうとした時、他所で行っている活動を参考にしていることである。例えば、主任児童委員は既存の活動を視察し、資料を取り寄せ、研修会に参加する等、まず自らが活動について勉強し、自分の地域での社会資源等を活用してどのようにできるかを検討している。これが活動の第一歩である。

第２には、児童委員活動を継続するために、民児協がバックアップし、組織的に取り組んでいることである。

これらの活動を支える財源は、多くは民児協からの補助金や民児協を経由した社会福祉協議会の補助金や助成金、寄付金であるが、活動事例５「香住っ子ひろば」は運営母体を変えたことで地域団体からの補助金を財源としている事例である。

さらに活動を実施するうえでは、民生委員・児童委員が参加・協力していることが挙げられる。全委員が参加しているのは、活動事例２「安中市乳幼児宅訪問」、活動事例 7-1「サマースクール」、各委員ができる範囲で参加・協力しているのが、活動事例３「ＳＮＳでつなぐ親子支援」、活動事例４「ホームスタート・さくら」、「香住っ子ひろば」、活動事例６「ひだまり」、活動事例 7-2「ふれあい交流会」、活動事例８「ひまわり食堂」である。なお活動事例１「チルチル・ミチル」は主任児童委員のみの活動であるが、民児協と区が協議し主任児童委員の数を増やした事例である。

このように、活動を継続するには、民児協の組織的なバックアップが重要であることがわかる。

第３には、各種機関・団体と連携・協働による活動であることが挙げられる。

「チルチル・ミチル」、「安中市乳幼児宅訪問」、「ＳＮＳでつなぐ親子支援」、「ホームスタート・さくら」は市との連携・協働の事業として始まった活動である。また、「香住っ子ひろば」は地域団体等と、「ひだまり」は地域の児童福祉施設と、「ひまわり食堂」は自治会連合会等と、「サマースクール」、「ふれあい交流会」は小学校、中学校と連携・協働で活動している。

子育てサロンや子どもの居場所づくり、子ども食堂では、地域の公民館や施設、学校等を拠点とすることが、地域での活動に対する理解や協力に結び付き、活動を広げていくことにつながっている。

また、「ひだまり」、「香住っ子ひろば」、「ひまわり食堂」は、学生ボランティアや地域住民ボランティアが学習や体験、調理スタッフとして活動を支えている。

このように、児童委員活動では、自治体、地域の機関・団体、学校等と密に連携・協働することが重要である。

第 4 には、自分たちができる範囲で活動に取り組んでいることがあげられる。

「香住っ子ひろば」は、運営母体を代え毎週土曜日を月 2 回に減らし、「ひまわり食堂」も月 2 回、「サマースクール」は、自分たちができる範囲で活動に取り組んでいる。無理をしないことが後継者に引き継ぎやすく、結果的に活動の継続につながると思われる。

一方、「ホームスタート・さくら」や「ＳＮＳでつなぐ親子支援」は、主任児童委員の強い思いが民児協を動かし活動につながった事例だが、組織的な活動にするために、民児協の理解を得ながらそれぞれのできる範囲で活動を広める工夫が必要である。

このように児童委員活動を継続するためには、民児協による活動資金や民生委員・児童委員の協力など組織的なバックアップ、安定した活動をするための各種機関・団体との連携・協働、活動の拠点づくり、地域住民や学生などのボランティアの協力などを構築し、自分たちが無理なくできる範囲で活動をすることが重要である。

8 つの活動事例では、いずれもヒアリングを行った活動だけにとどまらない。今ある活動から新しい活動につなげ、何かしらの支えが必要な子どもや孤立する親子等に対する課題意識をもち、児童委員活動の範囲を広めている。つまり、児童委員活動は、「児童委員方策 2017」における重点 1～4 のすべてを含んだ活動であるといえる。

多様な 8 事例のヒアリング調査の共通点は、民児協のバックアップがあることであった。バックアップにいたるまでに、主任児童委員は取り組みたい活動について熱心に学び検討し、民児協に提案し理解を得ている。8 事例が活動に取り組む入口はさまざまであるが、民児協が主任児童委員の思いや熱意を受け止めることで、活動が継続していることにつながっている。

そして何よりも、主任児童委員、民生委員・児童委員がみな、児童委員活動を楽しんでいることである。楽しい活動だからこそ続けられるといえる。

地域住民や学生の参加は、単に子育て支援施策・健全育成施策の実施、継続だけでなく、活動を通じて地域住民の結び付きを強め、広く地域における課題の発見と取り組みを実現する萌芽ともなる可能性がある。